

中華民國・台湾の『国際文学宗 教学会』報告

坂 本 進

1 輔仁大学

中華民國七五年（孫文の建国より数える、一九八六年のこと）一月八日から一日までの四日間、中華民國台湾の台北県にある唯一のカトリック総合大学・輔仁大学フジンに於て、国際文学宗教学会議（Fu-Jen-university first International conference on literature and religion）が開かれた。本会議の目的は、社会と科学の進展をみ物質的に豊かになった現代社会に於て、人間の生きることの意味・究極的な人生の目的を文学と宗教を介して、問い直すところにあった。このテーマをより下げる為、三人のキリスト教作家が重点的に取りあげられ、彼らの作品をめぐる研究発表と三人の作家の招聘しょうへいという形式をとりながら、参加者全員によってテーマが深められることが狙いとされた。三人の作家とは、英国のグレハム・グリーン、日本の遠藤周作、中国の王文興である。開催地輔仁大学は、戦前北京にありカトリック修道会神言会が経営して大学であったが、戦後蔣介石総統によって台湾で再開をみた大学である。理事長は米国

在中の八五才の蔣未亡人宋美齡である。（孫文・蔣介石・宋美齡共にキリスト者である）

2 現在の台湾事情

ここで若干現在の台湾事情を述べておくことにする。現在の台湾は、日本・韓国と共にアジアの経済大国であり、台北や高雄・台中等の大都市は、東京・ニューヨーク・香港・ソウル等とそのよそおいを同じくしている。かかる経済的繁栄をみている台湾にあって、欧米・日本にみられる世俗化・無神論的傾向は同様に助長され、宗教離れの観を呈している。さらに中国問題をめぐって大陸中国・香港・マカオと流動する国際情勢の中で、中華民國台湾は特別な国際的視野の中に置かれている。日本と比べ様々の国際問題と直接関わりをもつ台湾に於て、その国情も亦すこぶる国際的である。台湾の大学生・ビジネスマン・オフィサーの大部分の人が国際語としての英語を話すことができ、学界の発表も英語で行うことができるのは、その証左といえよう。このような経済的繁栄・国際的性格を背景とし、国際性・普遍性を指向するカトリック大学で、この会議は実現をみたのである。

3 文学宗教学会議

文学宗教学会議という名称は、日本人にはすこぶる奇異に聞えると思われる。日本の会議では、宗教者と文学者が共に学界や大会を開くということはまずないといっている。いや、むしろ両者は相反するものとみられてきたともいえよう。しかし、この会議に参加して、宗教学ないし宗教と文学が、共に人

問の問題を扱うものであり、より密接な関係を持つものであることが、痛感された。それは、この企画が外国語学部の手言会士バルゴ神父より出たという出所も関連しているが、このような宗教学会と文学学会を併せ両者の関連性をテーマとし、かつ国際的規模で開催することを可能にさせた今日の台湾の国際性普遍性及び多元性が、ここには躍如されていると思う。

4 キリスト教文学

四日間とも朝九時より午後五時まで、内外の学者による三人の作家についての研究成果の発表がなされ、質疑応答ともに熱心に進められた。三人の作家は、この研究発表及び質疑に答え（グリーンは高齢と健康上の理由から、インタヴューにかえて）、文学作品の中にある宗教性を語った。在台湾・淡江大学のマグリオル氏は、グリーン作品が何故人間的に弱い罪を犯す人間ばかりをえがいているのかと問題提起をし、そのように罪を犯す人間の現実をみるところからキリスト教文学ははじまることを指摘した。そして、グリーン文学がキリスト教文学とされるゆえんは、そのような罪と背中あうところに救いもまた存しているからであり、それをグリーンはえがいていると言及した。遠藤周作はさらに三日目の講演の中で次のように語った。文学は人間の現実を弱さ・罪をも含めてありのままえがいて、それを神が受けとってくださいることを読者の前に揭示するのであると。神が受けとってくださいるはずであるという遠藤周作の提示の仕方は、既に神と作品の中の罪人との出会いのみならず、神と読者とを出会わせているのである。しかし、彼は、文学の中

にある宗教性（人間を神に出会わせること）を提示するところに文学者の役割は限定されるのであって、その出会いに導きを与えるのは宗教者の役割であると述べ、両者の違いを明示した。遠藤特集の三日目、台湾という異国に於て、中国人及び在来・在独の等多くの来台した外人達が、彼について研究発表を行い論議しあっている光景をまのあたりにし、不思議な感じを持った。

5 中国人王文興

さて、最終日は台湾に於ける比較文学研究者にして作家の王文興デーであった。この日こそ、中華民国台湾の宗教意識を知る絶好の機会きかひの吉日であった。彼は一つのテーゼを与えた。「士は己を知る者の為に死す」と。この「士」と「己」は、過去に於て誰であり、今は誰なのか、そして「死す」ということはどういうことかについて王文興は熱心に論じた。しかし、残念ながら、来台して日が浅く、近代の中国文学と中華民国の文学事情について未だ理解が不足していた私にとって、彼の論旨はいまひとつ理解し難いものであった。にもかかわらず、ここで彼が自らのキリスト教信仰に生きる者という実存を踏まえ、彼の文学のテーゼを通して殉教というところを取り上げて人間の生き方を、中華民国に生きる者として中国人に問いかけていることは十分に感じられた。彼の文学テーゼの意味・その背景が日本人である私にとってはわからなくても、参集した中国人にはわがっていたように思われた。彼の発題に対して多くの質疑がなされ、中国人の本質は一体何なのかという中国人のアイデ

ンテイテイを問う論議が活発に展開され、参加された中国人作家からの発言が多くみられたことは、この証左であつたと思う。彼は、人間の究極的関心は何かとの質問に次のように答えた。

「どうやって生きていくか、キリスト者もヒューマニストも儒者も仏教徒も道教徒も、そして私の心の中もそれを知っている。」と。どう生きるかを、人間は皆知っている。しかし、知っていることを、どう行つていくか。経済発展をみ世俗化・無神論的傾向に助長され、かつ国際社会の中で特別の位置を担う国際国家中華民国台湾・中華民国七五年に於て、王文興はこの実践的課題を問いとして、発表討論をし尽した国際文学宗教会議の結びとして提示したのである。

文学と宗教について論じつつその人間論的内面化への深化は、同時に国際性をいちだんと帯びている台湾にあつては、おのずから中華民国台湾のより国際的・より普遍的な方向に道を開かせることに繋げられていく。かくて、日本から見れば風変わりともみえる、しかしよりスケールの壮大な国際学会は終りを告げたのである。

(次回開催は、四年後の予定である。)

第十一回国際社会学会世界大会

参加報告

ヤン・スィンゲドール

四年ごとが開かれる『国際社会学会』(ISA. International Sociological Association)の第十一回世界大会は、一九八六年八月十八日から二十二日にかけて、インドのニュー・デリーを会場に開催された。六〇ヶ国から三千名以上の社会学者が参集し、開催地であるインドからは若手学者の多いことがとくに目立ち、彼らの活躍ぶりも印象的であった。総合テーマの「社会変動——その諸問題と展望」について、毎日の午前中のシンポジウムの他、午後の各研究委員会のセッションおよび夕方のワーキング・グループで研究発表や討論があり、インドの夏の厳しい暑さにめげず活発に意見交換が行なわれた。三十八の研究委員会のうち、RC23 (Research Committee23)では宗教社会学者たちが集まり、十の研究発表会と一つの実務集会を通して学問だけではなく、相互の親善も促進された。他の研究委員会には日本人の参加者が比較的にかつたものの、日本の宗教社会学界からは本報告の執筆者が唯一人で、少し寂しい感じがしたことは否めない。

展 望
『宗教社会学研究委員会』が取り上げたテーマは次の通りであった。第一日目は、「宗教と権力」および「民間宗教」、第二日目は、「宗教、抑圧と解放」(二つのセッション)、第三日

目は、「インドや中国に関するM・ウェーバーの論文」および「弁証論的社会学と宗教」、第四日目と第五日目は、「雑多な主題」について興味深い発表があり、ここでもインドの宗教社会学者たちの貢献は著しいものであった。筆者は二日目の第二のセッションで「日本の諸宗教と差別の問題」について発表を行なったが、大会の開催地がインドであったこともあって、それに対して関心を示す人が多かった。また、最後の日の午前中、研究委員会の集会とは別に、「宗教の変容する顔」についてのシンポジウムがあり、様々な観点から世界のあらゆる国における現代の宗教事情が取り上げられた。

言うまでもなく、この大会がマンモス大会であっただけに、しかも各研究委員会のスケジュールがぎっしりと詰まっていたので、ここでその内容を全部網羅することは不可能であり、これについては大ざっぱな印象しか述べられない。確かに、この大会に最も影響を及ぼした要因は、ほかでもなく、それがインドで開かれたという事実であろう。前述したように、それは多くのインド人の参加を見たことに反映したのであるが、その上、インド人の学者がきわめて積極的に大会に貢献したことだけではなく、テーマの選出にも、また社会学という学問分野の性格についての論争にもこの要因が大きな位置を占めた。

開会式の演説からそれが明らかになった。
『インド社会学会』のスリニバス会長は、インド社会が抜本的な変化を経験しつつあることを指摘して、こういう状況における社会学者の責任感に次のように訴えた。「社会学者や人類学

者は、国家建設という刺激的な課題に取り組まないわけにはいかない。彼らは様々な分野において貢献できるのである。彼らは、人々の習慣、制度、価値観および思考様式をよく知っているので、発展計画の立案などに責任をもって自分なりの役割を果たすべきである」と。ISF会長のカルドーゾ氏も、インドの多民族国家が直面している特有の問題に言及し、「社会変動」を大会の総合テーマに選んだのは、一般論をさらに発展させるためよりも、現代社会における具体的な変化過程をよりよく理解できるように分析的・理論的道具を提供するためであると述べた。彼によれば、核兵器の脅威、発展途上国における貧困等は社会学者にとっても研究対象になるべきである。彼はこの関連において、マルクス主義的社会学はこれらの諸問題の解決にあまり適切な答えを持っていないと強調したのであるが、ニュー・デリー大会に大勢で参加していた共産圏の社会学者たちもまた、社会学がこのような具体的な問題を無視するならば自分の研究は無意味になってしまうとの意見を述べた。

社会学事業の「客観性」と関係のあるこの問題は大会中、一つのハブニングを機に著しい具体性を見せた。南アフリカから二人の社会学者が参列したのであるが、彼らのインド入国許可は大きな騒ぎを起こしたようであった。とくにインド人の間には、それが南アフリカ政府のアパルトヘイト政策の容認に相当することになるのではないかと主張して、この許可に反対する者が少なくなかった。ところが、この二人の南アフリカ人が大会の発表で実際に自分の政府を厳しく批判したので、反対者も

もちろんそれに同調し、アパルトヘイトを告発する署名運動を発足させた。言うまでもなく、それは大いに成功したのであるが、新会長に選ばれたイギリスのアーチャー氏（四十三歳の女性教授）は、この問題にふれて、自分は世界のあらゆる国における人種差別に反対するものであるが、社会学者はまず第一に学問に専修する者であるべきだから、安易に社会変動の「インスタント・レシピー」を提供しようとするればそれは学問の自己破壊をもたらすであろう、と発言した。

『宗教社会学研究委員会』では、アパルトヘイトの問題は話題にならなかつたものの、それに似たテーマについて様々な発表が行なわれた。その中に、当然のことながら、インドのカースト制度もたびたび取り上げられた。しかし、残念なことに、討論の時間がほとんどなく、セッションが発表だけで終った例が少なくなかった。したがって、そこから新しい展望が生まれてくることはほぼ不可能であり、宗教社会学の世界においても具体的な社会・政治問題が大きくクローズアップされているということが明確になったとはいえ、この動向を宗教社会学者としてどのように受け止めたらいかにについては有益な示唆はあまりなかつたわけである。なお、大会のプログラムに、ルックマン、モル、フェンなど、多くの一流の宗教社会学者の発表が予告されていたが、彼らが一言の説明もなく欠席になったことはとくにインドの若手学者がっかりさせた。

ある意味で当大会の最も有益な会合は、最後の日に開かれた RC236「実務集会」であった。日本の宗教学界に馴染深いイ

ギリスのJ・ベックフォード会長と、同じイギリスのN・ココサラキス事務担当の司会の下に、一九八二年から一九八六年までの「事業報告」が話し合われた。それによると、一九八三年、メキシコで開かれたISAの第十回世界大会以来、『ニューズ・レター』が四回発行され、委員会のメンバーは一五〇名になったそうである。とくにユネスコからの補助金のお陰で運営は順調に進められてきたのであるが、今後の見通しは必ずしも明るくはないと指摘された。この四年間、RC22の主催で二つの学術研究集会が行なわれた。それは、一九八四年の八月に、アメリカ合衆国の『宗教社会学学会』と共同で、「宗教社会学における理論および方法的諸問題」をテーマに、テキサス州のサン・アントニオ市で開かれた集会の他に、一九八五年の十一月に、ユーゴスラビアのドゥブロブニク大学で「多様な文化的・宗教的伝統と人権問題」について開催された国際シンポジウムであった。(後者の会議の報告は、『宗教研究』第二六七号、参照のこと。)さらに、RC22の執行委員会は二回ほど集まった。また、ニュー・デリーで新しい執行部が選ばれ、事務担当のN・ココサラキス氏は次の大会まで新会長になり、イタリアのR・チビリアーニ氏は事務を担当することになった。多くのメンバーから、日本において宗教社会学はとくに若手学者のうちで関心が高いと言われるのに、どうしてあまり協力してくれないのかという点が指摘され、筆者はその事情を説明するのに苦心したのである。

『国際社会学会』の大会を振り返ってみると、確かに参加は

とても有意義であったと言えよう。しかし、その反面、いくらか不満が残らないわけでもない。何千人も集まる大会を開催するための組織力は当然大きいものでなければならぬ。現地の『インド社会学会』はそれをみごとに成し遂げた。例えば、大会は同時に三つの会場で行なわれたので、会場間の交通は簡単な業ではなかったが、非常にスムーズに行なわれた。インドが発展途上国であるだけに、多くの参加者はそれについて深い危惧を覚えたようであるが、実際は大きなめ事はなかった。一方、大会の学術上の性格に関しては、筆者は様々な疑問をいだいていた。前述したように、それは決してインド人の学問的水準のためではない。確かに、彼らの多くは理論的問題に関する専門的知識よりも発展途上国が直面している具体的な問題解決に関心を示す者であった。しかし、それがまさに理論化の出発点であることを忘れてはならない。それに対して、欧米諸国の学者の多くは、社会そのものを研究対象にしながらも、社会との直接的な関わり合いをいくらか恐れているようにみえた。ある参加者は、インドや第三世界から来た学者の意見と、西洋の学者のうちに根強く残っている意見との差を次のようにまとめた。「研究の機能が理論を豊かにし、理論の機能が実践を助けることを忘れてはならない。学者の役割は一体何であろうか。ある人は、学者たちが人々運動✓のしもべになってはいけなくと主張するが、ある人は、知識を一般の人たちに持って行くべきだと主張する。しかし、両者はそれを成し遂げる方法についてはあまり自信を持たないようである」と。ニュー・デ

リーの大会でこのような意見の差がはっきりと浮き彫りになってきたことはよいことだと思いが、この二つの意見との間にはほとんど接近はなかったと言えよう。私見によれば、それは学問事業の本当の国際化はまだ十分に進んでいないからなのではないだろうか。次の「55」大会は恐らく四年後にヨーロッパで開催されることになるであろう。そのとき当然、第三世界からの参加者はまた非常に少数になるに相違ない。要するに、学問の国際化はすぐに出来るものではないかもしれない。われわれにとって今後の大きな課題となろう。

会報

○本号は第四五回學術大会紀要号であるが、本号記載の他に以下の公開講演ならびに研究発表があった。(発表順)

公開講演 究極的関心について(武内義範)

研究発表

第一部会

「ミッション・スクール」の教職員の意識調査から(北川直利)、宗教の個人化・内在化(井門富二夫)、宗門大学における仏教教育の理念(早島鏡正)

第三部会

ブルトマンの根本思想と聖書学の方法(土屋博)、11世紀の聖餐論争をめぐって(矢内義頭)

第五部会

日本仏教にみる宗教意識(青龍宗二)、一遍の遊行について(渡辺喜勝)、密教種子字論(斎藤彦松)、子島金剛界曼荼羅(横地清恵)

第六部会

倉田百三手放しの体験と西田哲学場所の自覚(海辺忠治)、親鸞の人間観(渡部眞弓)、垂加神道における「死」の問題(安蘇谷正彦)

第七部会

地藏像違憲訴訟の判決について(村上重良)、善宝寺信仰とシ

ヤーマニズム(佐藤憲昭)、葉師信仰の諸相(伊藤芳枝)

第八部会

ラマ神権制と天皇制(山折哲雄)、農村社会へのキリスト教の伝播・浸透過程(西光義秀)

なお発表を取消されたものは(部会、発表予定順)、岸本英夫「宗教学」における外道・異端の問題(中本光省)、文化における△狂気△の占める位置について(和田俊昭)、新プラトン主義と中世ドイツ神秘思想における「一」(吉田喜久子)、クザヌスにおける「conectura」の概念について(山下一道)、シェーラーの神概念について(宮野升宏)、聖書の贖罪精神とナシヨナリズムについての一考察(木原範恭)、シャンカラ解脱観の側面について(津崎浩一)、インド仏教史の時代区分の宗教哲学的基盤(三枝充恵)、元暁の阿梨耶識義について(李平来)、顛倒について—大乘涅槃経を中心として—(金子芳夫)、法華経第二章、第三章における仏弟子・菩薩名の一考察(関戸法夫)、『俱舍論』における Abhidharma の解釈をめぐって(田崎國彦)、転依の一考察(松本隆)、黒住教における御神幸について(藤原照彦)、初期仏教経典の編集形態について(森章司)、大本教における弥勒信仰について(出口栄二)。

執筆者紹介（執筆者）

平井 直房 國学院大学教授

坂本 進 輔仁大学研究生

ヤン・スイングドール 南山大学教授